

Title	生誕70才のヘルムリーン
Author(s)	八木, 浩
Citation	大阪外国語大学学報. 71(1-3) p.141-p.159
Issue Date	1986-03-31
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/81097
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

生誕70才のヘルムリン

八 木 浩

Hermlin in seinem 70. Geburtstag

Hiroshi YAGI

Als 1984 in Tokio Pen-Internationale Konferenz gehalten wurde, wurde es uns einmal bekannt gemacht, dass der Dichter Stephan Hermlin Japan besuchen wird. Wir Germanisten, die seine Gedichte immer mit grosser Freude gelesen hatte, waren darauf sehr gespannt, doch es wurde leider nicht verwirklicht. Es war wirklich schade, dass er nicht kommen konnte, weil er nicht nur den Germanisten, sondern auch japanischen Dichtern vertraut war und scharfe Einflüsse gegeben hatte.

Nach dem Zweiten Weltkrieg haben wir seine uns ganz neue Lyrik mit grosser Freude und Hochachtung gelesen, mehrere von ihr genau übersetzt, obgleich sie schwer waren. Ausserdem haben Germanisten seine Erzählungen übersetzt oder sie als deutsche Texte veröffentlicht.

Hier erinnere ich mich einiger schönen Übersetzungen von meinen Bekannten und Freunden, indem ich einige von ihnen zitiere. Wir haben Schallplatten seines „Mannsfelder Oratoriums“ oft hören können, und das wurde auch übersetzt. Wir haben mit dem Oratorium auch Brechts „Kriegsfibel“ benutzt, die auch übersetzt und mit ihren Photos ausgestellt wurde. Besonders aktiv hat mein Freund Takahara das getan und ihn erwähnt Walter Kaufmann, der zum Tokyo-Pen gekommen war (Neue Deutsche Literatur. 1984, 2). Hier in seinen Gedichten leuchteten „Metamorphosen einer höheren allgemeinemenschlichen Art“ in Gedichten „voll dialektischen Veränderung einer Landschaft oder eines menschlichen Gefühls“.

Aber ich selber übersetze seine Gedichte über Auschwitz oder Wasserstoffbombe, denn neben Paul Celan und Nelly Sachs hat die Bestürzung über den Tod von Millionen nirgends in Deutschland so schwerwiegende Sprache mit sinnvollen Figuren, Metaphern und Motiven gefunden wie bei Hermlins „Die Asche von Birkenau“ oder „Die Vögel und der Test“. Bechers und Hermlins Schwierigkeiten in der heutigen Welt werden auch sonst untersucht, indem verschiedene Materialien zusammengestellt werden.

シュテファン・ヘルムリーンの最も有名な、今日でも生き生きとしたしらべを伝える詩から始めよう。かれに『ビルケナウの灰』という詩がある¹⁾。ポーランドの都市オスフィエンチムの東方に1940年、ファシズム最大の強制収容所・殺害所がつくられた。アウシュヴィッツ I（主部）、アウシュヴィッツ II（殺害施設、ビルケナウ）、アウシュヴィッツ III（外部にある収容所）である。ここに収容された440万人の収容者のうち400万人がビルケナウの4個のガス炉で焼かれた。IとIIでは人体実験が行われ、IIIでは激しい工場労働が強いられた。

ヒロシマ・アウシュヴィッツののち詩を書くことは犯罪だ、といわれる時代にあつて、かれはアウシュヴィッツを歌った。わたしたちが戦後しばらくしてこの詩に接した時の感銘は、戦後40年をへた今日でも衰えていない。この詩でかれは、軽いもの、夕暮の風、ひんやりした冷氣、つばめの飛翔、涼しい雨雲、たんぼぼの花粉、子どもの輪舞、なでしこに止る蝶の羽、死にぎわの病人のたべる一口の食事などをあげて、その軽さのように人間は忘れる、人間の忘脚は易しく、簡単で、軽みそのものだという。ギリシャ人ならレーテの川の水のようにとということだろう。そこにはアドルノが犯罪視した非難ではなく、忘れることの自然らしさと人間らしさすらききとれるようである。(以下、左半分から右半分へ引用。)

夕暮の風のように 冷氣のように
雨をはらむつばめの飛翔のように軽い、
とっぷり汗をかいたあとの雲のように
たんぼぼの花粉のように
死者のまゆの上の雲のように軽い、
子どもらの古風な輪舞のように
なでしこの赤い口を吸う
蝶のはねのように軽い、
死にぎわの病人のたべる
ひとくちのたべもののように
そのように忘脚は軽い、
冷氣や夕暮の風のように。

しかし人間も忘れっぱなしではない。さびた鉄路、柱にかかる灰、白樺林のないビルケナウ（白樺の野という語源）、さびしいあざみの花の影。ポーランドの野辺に立つと、靴の底から、想い起こせ、と命ずるものがある。たしかにそうだ。広島だって、長崎だってそうだ。今年の広島や長崎は世界の人々と日本の訪問者でごったがえしていたが、それはその土をふんで、想い起こそうとする人々の大群だった。実際あう人みんながそういつていた。もちろんこれはたとえにすぎない。土を踏まなくても踏んだと思える人はより幸いであろう。

ひるとよるとがもつれ
 さびが鉄路をはむところ
 正しい、未だ報いられない人々の
 灰がふきさらしのマストにかかっている。
 白樺なき白樺の野辺に
 夕暮がさびしく
 あざみが石の上へ
 しるしをきざむ。
 ポーランドの野辺に
 まひるのあざみがあおざめるとき
 靴底の大地は命じた、
 思い起せと。

そうなると、思い出は山中の鉄塊のように、決心を前にした沈黙のように重いものである。灰となった者たちのすすが唇の上に付いているかのように重いのである。アウシュヴィツのガスかまど（やヒロシマの死の灰）に亡びた人々、かれらは重くなる。互いに愛しあっていたし、若かったし、この世にすべてをたくしていた。わたしたちの追憶は本当に重くなる。

重く 山中の鉄のように
 決心を前にした沈黙のように
 霧の村道の伐られた樹のように
 われわれの唇にある 人が焼いた
 者たちのすすのように
 最後の「さらば」のひびきのように
 ガスカまどに送られた者たちは
 いのちに満ちていた、
 たそがれを 愛を
 つぐみの歌を愛し、若かった。
 追憶の嵐の前に移る
 雨雲のように重かった。

ライナー・マリア・リルケの「ように」という使い方が、このような政治詩に使われるとは、と多くの人が驚いたことであろう。またゴットフリート・ベンのいう、「ように」ということばが入るともう現代詩ではない、というテーゼを知る人は、ここにその反証を見出したことであろう。わた

したちは想い起す。そこで詩人は、その人々がどんどん多くなり、どんな人殺しでも逃れられなくなる、という。人を攻撃したものは、その現場でつかまるだろう。世界のはてまで死の灰がとどいて、老若すべての人の手にわたり、その灰をまく。オルフォイスのからだが飛び散って世界の国民がうたをならったように、アウシュヴィツの灰がまかれて、犯罪者が自己を認めることとなろう。諸国民は立ち直り、生そのもののひびきを歌うだろう――。

だが想い起す者らは
ここにいる、たくさんいる、多くなる、
どんな人殺しものがれられない、
どんな霧もかくまってはくれない。
かれが人を攻撃したその現場で
かれはとりおさえられよう。
いくつもの鉄の太陽がまいた種子の
灰は、世界のはてまで飛ぶ。
老いも若きもこの灰を
まくようと手渡される。
追憶のように重く
忘脚のように軽く。

何百万もの
平和を叫ぶ声は
支配者らを追いはらい
死の神を追いつめる。
希望を信じる者たちは
鳩の翼の影が
灰を超えて飛ぶときに
白樺の緑の葉をつけるのを見る。
死のしらべはひびき絶え
生そのもののひびきとなる、
追憶のように重く
忘脚のように軽くなる。

この詩と、ツェーランの『死のフーガ』やネリイ・ザックスの詩がいつまでも人々の胸を打つことであろう。これはアウシュヴィツのことであるが、同じことがヒロシマ・ナガサキのことにも、

また今日核兵器をつくる者たちのことにもあてはまるにちがいない。幸いにして日本にも、ヘルムリーンに比べうる詩人たちがいる。峠三吉や原民喜や、その他今日まで、ヒロシマ・ナガサキをテーマに詩をかいいたすぐれた詩人たちがいる。峠三吉の語句にも²⁾

人工の太陽のもと 極北の不毛の地にも
きららかな黄金の都市がつくれるものをゆめみる、
働くものの憩いの葉かげに祝福の旗がゆれ
ひろしまの伝説がやさしい唇に語られるのをゆめみる、

噴火する地脈 震動する地殻のちからを殺戮にしか使えぬ
にんげんの皮をかぶった豚どもが
子供たちの絵物語りにだけのこって……

と歌われている。ここでも、また次の原民喜の詩でも、死のしらはひびき絶え、生そのもののひびきとなるのである³⁾。

ヒロシマのデルタに 青葉うづまけ
死と焔の記憶に よき祈りよこまれ
とわのみどりを 永遠のみどりを
ヒロシマのデルタに 青葉したたれ

ところで、戦後40年の日本、40才、30才、20才の日本人は、いったいこのように想起しうるだろうか。忘れる、といっても始めから知らないのではないか。どうすればかれらに40年前のことを考えてもらえるだろうか。それこそが詩の大きな課題にちがいない。これらは、ヘルムリーンのものも、峠三吉や原民喜のものも、まだ生きている。ほくたちに新しい問とその答を求めている。そして今日まで、日本とドイツの詩人たちは、それを問題にしてきた。文学はそんなものではない、という人があろうが、たいへん多くの作品がそれととりくんできた。そのことは別に詳しくあとづけるつもりでいる。ともかく文学くさい地点を思い切って離れ、語ろう、アウシュヴィツ、ヒロシマ、ナガサキを！そしてそれらを忘れないようにしよう。わたしたちがいくら語っても聞いてくれないほど若い人がわれわれから離れてしまっている、などということはありうるはずがない。人間は人間だから断じてそんなことはない、と同世代人のわたしたちは信じているのである。

ヘルムリーンはそのためにもう一つの詩を書いている。それは水爆実験についての詩である。ピキニを始め、太平洋の島々で三百回以上も実験されてきたおそろしい水爆実験を原住民の話や詩が素通りできるはずはない。アメリカのネバダの実験でおそろべき後遺症に悩み、死んでいったアメリカのヒバクシャ、オーストラリアの奥地で灰をかぶった悲惨な原住民アボリジニなど、忘れられ

てはならないことでいっぱいだが、詩人はそれを現在や未来へ結びつけてうたわねばならない。ところでヘルムリーンはそのために渡り鳥の話を取りあげた⁴⁾。

サバンナを飛び立ち、熱帯洋を超えて進むかれらの、愛らしい、勇敢な列、目もみえないかもしれない、煙のような、だまって飛ぶ本能と愛の姿——雷が鳴っても、台風が吹いても驚かない鳥、それは偉大な飛翔である。鳴き、叫ぶ一筋の煙、ところがかれらはある日、強烈な白昼の光を見、その妖怪に強いられて行路を変えたという——。

鳥と実験

新聞は報道した、水爆実験の影響で南海上空の渡り鳥が慣習的なルートを変えた。

風と生命の必要性がかれらを熱帯の海の向うへ
草原から追い立てた、耳も目も不自由なのに
遠くから。そして昔からの習慣通り
食物や木の枝を見つけるために。

雷はかれらを引きとめえない、台風も網も。
大きな飛翔へと何かが叫んでいる。
同じ道を 絶えず同じ列をなし
同じ目的を獲ようとして叫ぶ一筋の煙。

かれらは水の前でためらわない、嵐の前でも。
だがある日かれらは見た、高い真夏の陽の中に
より高い光を。その恐るべき幻のため

かれらはその時から飛行を変えざるをえなかった。
そして新天地を より安らかな世界を求めた。
この変更でわれわれの心をゆり動かすがよい。

ヘルムリーンは、このけなげな鳥たちの話に胸がつぶれない人がいようか、とうたった。これは繊細な詩だ。たかが鳥の煙。それで心が動かされるという。かわずとびこむ水の音で心がつぶれるのなら、それもまた当然ではないか。たしかにわたしたちの心はゆり動かされる。そしてそれからどうなのか。ヘルムリーンはそれからどうするかについて語っていない。詩から理論へ、理論から実践へ、ものごとは続いていくものである。胸もつぶれることをやったやつらの考えをつかむべきだ。安保条約だ、同盟だ、抑止力だ、第一撃だといって、憲法と違ったことを平気でやってきた40

年の足どりについて、20代の人も40代の人も考えてみることになるだろう。大国が交渉したり、国連が投票したり、交渉したかいもなく、なんにもきまらなかったり、他方ではアフリカの飢餓や、グラナダへの出兵と弾圧や、米ソの兵器を用いたさまざまな戦争がある。こういうようにヘルムリーンの詩は理論へ、実践へとすすむきっかけになりはしないか。

このことに答えるかのように、かれより24才若いドイツ民主共和国の詩人フォルカー・ブラウンが、『鳥と実験 その二』を1984年、この詩人を70才の生誕一年前に祝うかのように発表した。この詩はヘルムリーンに劣らずあでやかに、しかしもっと残酷に、鳥と実験というテーマにとりくんでいる。ヘルムリーンの詩が美しすぎる、といわんばかりにうたうフォルカー・ブラウンは、ヘルムリーンよりももっと政治的に、もっと実践的に、「わたしたちはこんな道を変えなくてはならないのだ」としめくくっているのである⁵⁾。

鳥と実験 その二

ローベルト・シェールの報告による。

あほうどりは水上に住み
うらやましい軽さでとびかける。
そよ風が吹く中を 息をもいたわる
あの翼のあでやかなひろげかたをみる。

と思ったが、これは何か、翼が煙る。
燃えつつ飛んで、身をねじり
ぶきみにくねらせた首をもたげ
もっとよいところがないかと探している。

東がよいか西がよいか どっちにしよう。
たそがれを両手を祈りにとさし出し
溶けていく——なお 口に出せない弱々しさで。

それから海の水が高くなり
雷鳴がつつみこむ。わたしたちは
こんな道を変えなくてはならないのだ。

ヘルムリーンの詩はこういう力を先輩のヨハネス・ベッヒャーから学びとってきたものである。そこでわたしは、このよくいわれることを証しするため、この詩と最も近い詩境のベッヒャーの詩

『ルブリンの靴』をとりあげてみよう⁹⁾。この詩は子どもらの靴をテーマにしており、ルブリン強制収容所の子どもらの靴が主人公である。ヘルムリーンではビルケーナウの灰やサバンナの鳥たちが、ベッヒャーでは子どもらの靴がバラードになっている。ベッヒャーは1944年に東ポーランドのルブリンのナチス強制収容所の詩をかいた。ここでベッヒャーは第一連目と、終りの32～36連目でがちりとしたわくぐみをつくっている。一連目は、

招喚された証人らのうち
かれらをどうして忘れえようか。
かれらが列をなして広間に入ると
裁判官が立ち上った。

で始まり、次の2連目から31連目へと進んでいく。この中間の29連目がバラードをなしている。9連目ごろには小説のように時間が入りこんでくる。

母親がみえてくる、両腕に
子どもをかかえている、
「かあさん すばらしい靴よ、
柔い あたたかい靴よ。」

「どうして買えるっていうの、
お金が足りないわ。……」
木製のサンダルだってくる、
疲れておもたそうだ。
「どうして 買えるっていうの、
お金が足りないわ。……」
木製のサンダルだってくる、
疲れて おもそうだ。

靴下を片方ひきづってくる、
ひざのあたりが破れている、……
この行列は何だろう、わかる人がいないか。
このはるかなメロディーは何だろう。

18行目から子どもたちがガスかまどへおくられるシーンがまきもどされて展開される。輸送車、

飢餓，おいける猛犬，23行目からはいっそう深刻である――

「寒くはないだろうよ，もう。
たっぷり暖防してあるからね。
ルブリンは暖いところさ，
永遠のおてんとさまがあるからさ。」

「ルブリン収容所で
われわれを迎えてくれたのは
ドイツのおばさん。――「人形天使」が
靴をお脱ぎとிட்டのだ。

わたしたちが泣き出すと
おばさんはいう，「きつとすぐ
おてんとさまが輝くよ，
だから早く靴をおぬぎ。

しっかりおし。番号おかけ。
ちゃんと靴を脱ぎましたか。
寒いことなんて もうおしまい，
おてんとさまがでできますよ。

何なの？ 恥ずかしい。泣いてんの。
人形さん どこがいたいっていうの。
わたし ドイツの童話のおばさん。
善良なドイツの人形の精。

さあ，お時間ですよ。いきますよ。
ひざまずくなんて 何ですか。
うたいましょう。お祈りなんだ。
ルブリンはおてんとさんの町。」

ドイツのおばさんは歌をうたい
スカートをひらめかせて進み，

太陽があつくもえているところで
家の前で 数えている。

百人単位で はだかで入り
子どもの叫び声 絶える息
それから靴の山が ドイツ
帝国へと 送られていく。

ルブリンの強制収容所
これはもうかる商売だ。
捕虜の列 子どもの行列
輝いているドイツの太陽。

『ビルケーナウの灰』の中で、ヘルムリーンは、このような詳しい叙事性を学びとったわけではなかった。『鳥と実験』ではひとつの短い語りに集約されたが、ただ優しい繊細な心は二つに共通のものである。『ビルケーナウの灰』のモラル、「だが想いおこす者らは／ここにいる、たくさんいる、多くなる／どんな人殺しも のがれられない／どんな霧もかくまってくれない／かれが人を攻撃したその現場で／かれはとりおさえられよう」のあたりはベッヒャーの次の終りの5連と同一のモチーフ、同一の思いではなからうか。

死者たちがいつの日か立ち上る時
ドイツ中に歩みが高鳴る時
かれらの影がひろがる時
靴もみんな 歩みはじめる。

幾千もの子どもの行列が
列をなして進んでいく、
殺し屋たちがどこにかくれようが
不気味に迫っていくだろう。

かれらは階段を上っていく
静かに部屋に入っていく、
首切り人はしばられたように動けず
罪の証拠におののいている。

太陽はきっと輝くだろう。
 真実はみんな明らかになる。
 大きな子どもの泣き声がする、
 子どものうたう墓のうたが。

子ども殺しは明白になった。
 証人はみんな そのあかしを立てる。
 これら証人の中でも忘れがたいのは
 ルブリンの子どもの靴だ。

しかし2人のちがいもある。ヘルムリーンのバラードの大きな凝縮度はベッヒアーにはみられない。ベッヒアーはわかりやすい、自然の流に従っているが、ヘルムリーンはそれをせきとめてしまう。とくにヘルムリーンは多くの比喩を用いる。アウシュヴィツ、忘却、いろいろの軽いもの、いろいろの重いもの、水爆実験、渡り鳥と光、路の変更……比喩のまた比喩、比喩と類推の重層がベッヒアーにみられないこまやかさである。これはほとんどシュールレアリズムといえそうであるが、もちろんそこまでは致っていない。しかし日本の詩ではこれほどまで精密にうたったものはないかもしれない。峠三吉や原民喜、栗原貞子などにそういうものはみあたらない。日本詩はやはりはるかに象徴的であって、比喩もその目的の圏内に限られている。

ところで険しい嶺を登りつめたかのように、そしてそこから降りることをこばむかのように、ヘルムリーンは1958年以来、もう詩を発表しなかった。この年にかれの最後の詩、『詩人の死』が出たが⁷⁾、この詩は先輩でも友人でもある詩人、ヨハネス・R・ベッヒアーへの哀悼の詩であった。ベッヒアーは10月11日、文化大臣として死去したのである。かれのベッヒアー敬愛はその当時のエッセイをみても、たいへんなものであったことがわかる。かれは書いている：「『幸福探究者と七つの大罪』を2週間にわたり精読した⁸⁾。」これは新しい詩の世界の窓、自己ときたるべきものを求める世界探究だ (ein Fenster in eine neue poetische Welt, die Suche der Welt nach dem Kommenden)。ここにはあらゆるベッヒアーの要素が集っている：戦争、大都市、二重に意義深い楽天主義が。ここには最もすばらしい、また意味深いソネットがみられる。人生と時代の決算；根底から立ち上り、世界を新しく建設する者がある。ベッヒアーは創造の人であるとともに勝利のたたかいの人だ。革命的プロレタリアートの詩人であるかれは、芸術と支配階級のあいだの古来の高籐・矛盾を止揚する。かれは単純卒直な真実を、諸国民の追憶を、相互の自己了解をうたう。かれの詩は弁証法の壮大な武器である。単純化の恐怖も怖れずにのべ、芸術を擁護する。これはこの社会主義国を弁護する国家詩人だ、とまでヘルムリーンはベッヒアーのことをのべ、この人間的國家の詩人 (der Staatsdichter dieses Menschenstaates) は未来への星のまなざしを持つとなす。芸術とは人間の中で人間が造形的に立ちあがることだという (der gestaltete Aufstand des Menschen in Menschen)。

あらゆる社会主義文学のテーマは、「人間がいかに偉大であることか／人間がいかにみじめであることか／みろ 自己を認識する／何という存在であることか／人間のみじめさと偉大さよ」という句にある通りだ、とヘルムリーネはしるしている。この敬愛する詩人の死をヘルムリーネはこううたい始める――

詩人の死――ヨハネス・R・ベッヒアーの想い出に――

もう秋はそこにある、果実の落下のように
うたはひびき絶え 森はどよめいて
死者たちの落下を告げ
森に向って吹く嵐がすさぶ。

なぜなら 暗い ものの上へ大きく
眠りがかぶさり 影射す気配が静けさに
あこがれる。光のきらめきが消え
烈しい一日が沈黙していく。

全体で13連であるが、逝く人、止まる人がテーマになり、くっきりとそれが7，9連目にこううたい出されている：

残された者に 明るい時代の姿が告げられ
とつくの昔 すばらしく約束されたことが
静けさの中に たそがれの
風になびき 美しく空をいろどる……

空よ 雲よ きみたちのところへ おそろしい比喩よ
空高くきらめく光よ 空に漂う者たちよ
不安も知らず 美しい者よ きみたちのところへ
目も耳もくぎづけられ 不安は消える。

しかしこの詩はタイトルの通りのベッヒアー追悼だけを歌っているのではなさそうである。これとは別の内容をも歌っているらしい。すなわち一般的な形で、かれの詩の終焉をうたったのではなかろうか。一節目はうたの終りを、二節目は静けさへの必要と要求がうたわれる。詩人ベッヒアーへの追憶のみでなく、さらに詩人ヘルムリーネの終焉のうたではなかろうか。いずれにしてもこの

詩は一つのメルクマールをなして、かれの詩作を完結した。

ヘルムリーンは1915年生まれで、ベッヒアーの死の年には43才であった。1945年、戦争が終った時は30才であった。かれの詩はおくれて出版されたわけだし、詩の実験も大いに妨げられたにちがいない。戦火の中をくぐりぬけての、ファシズムから社会主義への一瞬のあいだのようにこの13年が過ぎていったことであろう。そしてかれの詩はもうここで終れりの感があったし、また実際そうになっていたわけである。というのもかれのうたのしらべはもう不動のもので、その姿勢の変化はありえず、発展の余地は少なかった。『詩人の死』はそのことの予感でもあったのではなかろうか。ベッヒアーとともに生きたかれは、ベッヒアーとともに一つの詩作の終りを迎えたのであろう。

もちろんかれはその他のことでも、さらに詩作することを妨げられたかもしれない。18年間に51の詩。ほとんどすべての詩の成立年は明白であった。その終りを飾るこの難解な詩の終り2連はこうなっている：

なぜならそこにもここにも苦しいたたかいの
 いえるきざしなく たたかいの中にずっと長く
 毎日が未来とともに
 かつてないいさの中にある。

だが時が欲するままに新しいものが成長する、
 欠乏にあえぎつつも 遠くから呼びもどされる。
 かれなしに花ひらく者をまた
 かれは未来のさちとして賛える。

ベッヒアーのなめらかな、わかりやすい、ややもすればコンベンショナルな詩句に反し、それと断絶したしらべをもちながらも、ヘルムリーンはベッヒアーを賛え、また自己をもその影におくかのようである。これは希望にみちた再出発ではなく、やはり一つのポエジーの消失である。しかしこれは文学の、とくに詩の危機についての超個人的な状況判断にもとづいてうたわれているのである。コミュニストで、いろいろの不安をもつ、ときがたい矛盾の人ヘルムリーンは、またその時代の子なのである。(わたしはここでDDRの経済的・政治的危機について深く立ち入り、ヘルムリーンをそのまっただ中におければよいのだが、それは力量に余るので、あきらめざるをえない。)政治的にベッヒアーと一つにつながれていたヘルムリーンも、DDRの文化大臣としてのベッヒアーにはいろいろな問題を感じていた、という西独の文献もある⁹⁾。だが2つだけはっきりいえることがある。その一つはベッヒアーと一つでも、リルケに、さらにベンに、詩風の点でヘルムリーンは親近感を覚えていたということ、もう一つは、1940年代にスターリンを熱中してほめ、うたったことである。それは『遠くまで見つめる目のバラード』である。つづいて1948年、49年に強まったスター

リンとソビエト崇拜の大波の中で、ヘルムリーネは大きく現われて、それに門を開いて、1949年に『スターリン』を、また、1951年に『マンスフェルト・オラトリウム』を創ったのである。もちろんこのことは深刻である。徹底した批判と克服なくしてはスターリンのあやまりからの精算はない。ヘルムリーネもきっとそう決意したことであろう。それはまさにこの詩のころであったにちがいない。

今の世界、今のドイツ民主共和国、その文学状況はどうだろう。それは決してヘルムリーネの詩境にかなうものではない。ヘルムリーネの散文や評論、キップハルト、ペーター・ヴァイスの近作が示すアクチュアリティは若い人に十分には伝えられていない。日常性の文学、個人のゆめ、かなしみ、愛、アングラ、SF、変身、パラダイムの変換、それらはわたしたちの国だけのものでもない。それらが社会主義国の中でもいくらかの熱いまなざしでみつめられている。そこに日常性の政治、日常性の批判があり、また逆に日常性への埋没が——とくにわれわれの国では——強くあらわれる。いったい社会主義は満足に進展しているのか、停滞しているのか、不満が高まっているのか、あるいはむつかしさの中でそれを避けたり、タブー視したりする傾向があるのか、昔の方がよかったという人もいるが、それはどういう点でなのか、などなど疑問も出てくることだろう。核兵器と社会主義、ソ連と平和運動、社会主義と自由、社会主義と侵略などなど大きな今日の悩みにちがいない。ヘルムリーネのようにまっすぐ生涯の大半を歩みきった者には、これが最大の問題となるだろう。

わたしたちがヘルムリーネから学ぶものは、詩が上手だということのみではなく、その生涯の一貫性である。かれは1915年とエムニッツ（現在のカール・マルクス・シュタット）に生まれ、1931年にドイツ共産主義青年同盟に加わり、非合法反ナチ活動を続け、一旦とらえられたが、1936年に国外に亡命、パレスチナ、エジプト、イギリス、スペインへ転々と移住し、スペインでテールマン旅団のもとに銃をとった時は21才。テールマン旅団が解散したのに、若きヘルムリーネは1940年にはナチス占領下のフランスに潜入し、ポール・エリュアールに学びつつレジスタンスを続け、とらえられたが、うまくスイスにのがれることに成功した。1942年にパリのルーブルでかかれたかれの詩を一篇、高原宏平訳でかかげてみよう¹⁰⁾——

サモトラケ島にある勝利の女神ニーケの像

ぼくらの眼前にある無限に昇る階段

この大理石はぼくらの足を使い果たすだろう。

ぼくら自身 石と化したのか もはや狭い一筋の道しか行かぬ

あの白々とした闇の中に 光も沈んでしまった

この隷属の重荷 見えるのは ただ足もとだけだ
 血を滲ませながら 息もつかず 大理石を踏んでゆく足
 屈辱のなかを登りつづけねばならぬ足
 ぼくらを上へ上へと押しあげるものは何か

いちど眼をあげると 思いもよらぬものが
 ぼくらを待ちかまえているではないか ああ これだったのだ
 これを守りぬこう……とざされたぼくらの心は
 翼をひろげ かぎりなく明けはなたれる

はてしない階段はぼくらの心に流れ入る
 ニーケは迫る 勝利はぼくらのものだ

何というたたかいだろう。このような烈しいたたかいへの意志は、今わたしたちの胸中に燃えあがりにくいかもしれない。このころのかれの心中をよく伝えてなお余りある詩だといえよう。30才のヘルムリーネは1945年ドイツに帰り、フランクフルト・アム・マインの放送局の文宣課長となり、ベッヒャー、ゼーガース、プレヒトなどの亡命作家の紹介につとめたが、1947年、32才の時、新しい社会的局面のもとに意を決し、東ベルリンにと赴いたのであった。このころのかれの作品が師と仰いだエリュアールがどういう詩論をもっていたかをここで回顧しておこう¹¹⁾。かれは状況の詩を主張した。しかし逸話が秘事にとじこもったままの状況ではなく、事件を歴史と詩の高さにまで高める状況を主張した。クロードのように非理性的な戦争の逸話を書くのではない。詩を凋落するもの、亡びゆくものに結びつけることはできない。エリュアールは発展に結びつく状況、それによって人間が生命への一步を進む状況をうたう。「状況の詩」は社会の要請に答える。「外部の状況はまるで詩人自身が作ったものであるかのように、内的状況と一致しなければならない。……詩人は理想を求める。そして理想が詩人を導き、人間進歩の曲線に詩人をきざみこむ。すると次第に世界が詩人になり、世界が詩人を通じてうたう。」とくにエリュアールは「現実の世界を表現しなければならぬだけでなく、われわれの内的世界、われわれの夢である変革された世界を表現せねばならぬ。」といい、さらに詩的才能を「うそをいわぬ才能」、「行動すること」となし、詩は行動の手段、前進の手段であるという。

こういうエリュアールの考えは、このころのかれの作品にいちぢるしく目立っている。『第一列』という30人余の自分の世代の人々の、ヒットラー戦争に反対してたたかったドイツの青年たちの物語りもその例である¹²⁾。死を怖れず、生のために死んでいく、さまざまな立場の一人一人の簡潔な、具体的・状況的イメージは読む人々を釘づけにはおかなかったのである。1949年にできた四つの短篇小説は『共通の時』と題されている¹³⁾。これら4篇について、ハンス・マイアーはいう、

4 篇の事件も体験も、同じく第二次世界大戦のファシズム、反ファシズムの問題にしばられている¹⁴⁾。『大都市の孤独の克服についてのバラード』（1943年）の次の一節がこれらの小説のモットーである¹⁵⁾。

敵は撃たれた。敵の隊列のうしろを
隊列とともにしりぞく。この勝利の中にも淋しく
進んでいく。荒々しい意志で
口に言えない未来へ 決してもう一人でなく。

人物はどの短篇でも、共通の時への途上（Auf dem Weg）にある。孤独から、孤独を克服して、共同の道（Gemeinsamkeit）へ、みんなの道へと進んでいく。かれらはその過渡地点にあるのである。ヘルムリーネ自身が、先述のように1947年にその道を歩んでいた。そしてその最も雄弁な「状況の詩」が『二年のむなしい夏ののちのバラード』（1947）である¹⁶⁾。あきらかに「二年のむなしい夏」とはこの2年、すなわち1945～1947年であった。1945年5月、ドイツ軍は無条件降伏し、6月ドイツ管理にかんする四ヶ国協定、7月ポツダム協定、米英仏ベルリン進駐、11月戦犯の裁判開始、12月モスクーでの三国外相会談、パリでの賠償会議、1946年6月パリ外相会議、9月戦犯12名処刑、12月米英（のちに仏）占領区統合と続き、1947年にはモスクーとロンドンで外相会議が決裂し、東西の冷戦が深く東西の溝をつくっていった。東のドイツでは共産党と社会民主党が合流し、社会主義統一党をなし、党農の民主主義独裁をかかげ（1947年9月）、さらに10月には金属、繊維工場の国有化を行った。こういうときに西のドイツでヨーロッパの社会主義の実現につとめていたヘルムリーネにとって、これらの状況は大きな衝撃であったにちがいない。ドイツの民主的統一は空しくなり、詩人は東のドイツを選ばざるをえなくなった。詩人はこの詩で、凝縮した形で反ファシズムの奇蹟の年を回想し、自分の足どりをうたう。そして状況をこのようにしめくくるのである：

死者たちの開かれた目には
もはやあらたな日は生まれてこない。
無傷のままでうごめくかれらは
昔のタイプの残りをあつめる。
だが可能性の輪舞は
生き生きと動き出す、
それは時が先へ進まず
針が霜に凍りつくから。

軍国主義が再び幅をきかし、「手品師とカルタ師が市場で、追う者と追われる者を取りかえっこする」この状況下に、ハインリッヒ・ベルも、ギュンター・グラスも、時を停止させて、針を凍りつかせ、過去の克服を思い見たのである。この詩についてはかつてくわしく論じたことがあるのでこれくらいにし、ヘルムリーネがもう一つのドイツ、その可能性の輪舞をどうみていたかを示す詩『こちらの人々 あちらの人々』（1949年）の一節を訳出しておこう¹⁷⁾：

草が上に伸びるゆえに
槌が敷石を打つゆえに
こわれた机の上の本に
疲れた目が真実を探すゆえに
こだまが叫びに答えるゆえに
茎が鎌を求めるゆえに
夜はあらゆる人々に近く
昼はこちらの人々に近い。……
あちらの人々には終焉とみえ
こちらの人々には始まりとみえるのだ。

ドイツ国民が結局一つの祖国をつくりえず、分裂していくさまを、かれは「こちらの人々には黎明が、あちらの人々にはむしばむ炎が」と歌った。ところがフォルカー・ブラウンはこの国の今日をみて、ヘルムリーネにこたえて、あるいはヘルムリーネの意を体して、氷のように今日の状況からみてうたうのである¹⁸⁾。

こちらの人をかれはわれわれのものと呼んだ。そしてどの風も
このおとずれをわれわれの胸からとり去りはしない。
今こちらの人 あちらの人は誰のことか明らかだ。
かれらがどんな人かも明らかなのだ。こうして今や
戒められているのはわれわれの方だ。時とともに
さま変るとも 変らないことといえ
もし一打ごとに決断して生きないなら
はかない うつろう存在に過ぎない ということだ。
過ぎゆく時の流れの中で われわれが
あちらの人々だった者が見ることよりは
別のことを欲する別の存在に
日々変っていかないならば

再び戸がすべて碎けて

壁が抜けてあちらの群が出発していく。

かれの最近の散文『夕べの光』は、このような想いをもこめているようである¹⁹⁾。この新しい散文は大いに高く評価されたものの、芸術至上主義的で、形式に比して内容稀薄との批判もあり、クチンスキーはヘルムリーネに体験の、おそらく社会主義建設にかかわる部分のかきかえをうながしたというが²⁰⁾、これはヘルムリーネに今日の社会への厳しい見方があったからこそ考えることにちがいない。たとえばかれは、30回も読んできた『共産党宣言』のよみちがえを知っておどろいたことをしるした。それは「各人の自由な発展が万人の自由な発展の前提であるような一つの協同社会」という部分を逆にとって、「万人の自由な発展が各人の自由な発展の前提であるような協同社会」と読みちがえてきた、というのである。かくのごとく、スターリンの時代をかみしめたヘルムリーネは各人の自由を主張する。ここにいたってわたしたちは思うのである：あの疑いのない、反ナチスの奇蹟の年はまことに明白なものを黒白のごとく鮮かに示していた。ナチスは悪で、これとの全力をあげたたたかいのみが真実であった。万人の自由の理念に各自の自由も服しえたことであろう。そこにすべてを捧げたヘルムリーネにとって、戦後のこの一地点、すなわち各自の自由な発展こそが中心となる地点へのアプローチは、大きな落差と大きな転化をへた上でこそ可能であったであろう。

70周年の生誕を東西ドイツの新聞や雑誌や出版物は祝っている²¹⁾。しかし不思議にこのあたりの詩人の悩みにふれるところは少なく、やはり詩人の反ファシズムのたたかいや、東のドイツへの新しい決意をかかげる記事が多い。現在余りにも個人の虚構や夢にとじこもうとする青年が急増しているようにみえる時、カプセル人間化し、日常性、個人、幸福の中へもぐりこむだけの今日の若いゼネレーションに対し、突然ヘルムリーネの詩憶が対決させられるとすれば、きわめて鮮烈なコントラストをなして、多くの良識に反省を迫るものがあるにちがいない。

〔注〕

ヘルムリーネの詩集には、Gedichte. Reclam (DDR) 1962, Gesammelte Gedichte. Frankfurt 1982. 同じく Hanser, München 1979 がある。またヘルムリーネを包括的に紹介した書物としては、Silvia Schlenstedt : Stefan Hermlin. Schriftsteller der Gegenwart 2. Volk und Wissen 1985 があげられる。同氏は1984年3月の Weimarer Beiträge に詩人との対話およびヘルムリーネのエッセイ論の2つの寄稿をかかげた。

1) Die Asche von Birkenau.

2) 峠三吉：朝

3) 原民喜：永遠のみどり

4) Die Vögel und der Test.

5) Volker Braun : Die Vögel und der Test (2) Neue Deutsche Literatur 2, 1984.

6) Johannes R. Becher : Kinderschuhe aus Lublin. (八木浩訳『ルブリンの靴』異郷 1984. 9.)

7) Der Tod des Dichters.

- 8) Stephan Hirmlin : Begegnungen. 1954-1959. そのほかエッセイ集として Äußerungen 1944-1982 Aufbau Verlag 1984, Aufsätze, Reportagen, Reden, Interviews. Fischer 1983, 同じく Hanser 1980 がある。
- 9) Konrad Franke : Aus dem Erlebnis des Krieges, Stephan Hermlin u. a. In : Panorama. Literatur der DDR. Kindler Verlag 1980. ほかに西独には Gregor Laschen : Die Gewürzworte der Sprache. Zur Lyrik Stephan Hermlin (In : Lyrik in der DDR. Athenäum 1971) Hanjo Kesting : Der Worte Wunden bluten heute nur nach innen. Merkur 401. Nov. 1981 などがある。
- 10) 高原宏平訳 (ドイツ解放詩集, 河出書房 1956に含まれている。ほかに同氏訳で『マンスフェルト鉱山』黒いポンプ別冊1960がある。)
- 11) エリュアール : 状況の詩 (江原順訳, 1952) ヘルムリーンにはエリュアール訳詩集が1947, 1949年にみられる。
- 12) Stephan Hermlin : Die erste Reihe. Verlag Neues Leben 1959. (山下肇訳『第一列』岩波書店 1955)
- 13) Stephan Hermlin : Die Zeit der Gemeinsamkeit. Reclam 1959. Arkadien. Gesammelte Erzählungen. Reclam 1983. Lebensfrist. Gesammelte Erzählungen. Wagenbach 1980.
- 14) Hans Mayer : Nachort. (ibid 13)
- 15) Ballade von der Überwindung der Einsamkeit in den großen Städten.
- 16) Ballade nach zwei vergeblichen Sommern (八木浩訳と論文『二年の空しい夏ののちのバラード——ヘルムリーンのみた東西ドイツのわかれ目』日独レビュー 6. 1965年大阪, 同 1. 4. に DDR 詩と音楽, 2. に『マンスフェルト鉱山』論が含まれている。)
- 17) Die einen und die anderen.
- 18) Volker Braun : Zu Hermlin, Die einen und die anderen.
- 19) Stephan Hermlin : Abendlicht. Reclam 1981. „Abendlicht“, Prosa. Wagenbach, Berlin 1979.
- 20) 小西悟 : 『ボエジーに結晶した現代史の証言——S. Hermlin の „Abendlicht“ の意味するもの』ドイツ文学 67, 1981.
- 21) Stephan Hermlin : Über die Nachfolge des Widerstandes. Die Zeit. Nr. 16. 12. April 1985.
 Stephan Hermlin : Ich habe den Eindruck, daß ich da, wo ich bin, gebraucht werde. Aus „Rückkehr“. Aus Briefen von Freunden und Genossen. Der Bienenstock. April 1985.
 Verse, die von Kämpfen des Jahrhunderts künden. Stephan Hermlin stellte deutschsprachige Lyrik vor. Neues Deutschland.
 Horst Haase : Einer der Großen unserer Literatur, ein unbeugsamer Kämpfer für den Frieden. Neues Deutschland. 13/14. April 1985.
 Ein hervorragender Erzähler, Wochenpost. Nr. 14. 1985.
 Silvia Schlensted : Ein Schriftsteller als Zeuge der geschichtlichen Veränderungen. Neues Deutschland. 24. Feb. 1984.
 Klaus Werner : Herkünfte einer faszinierenden Dichtung. Neue Deutsche Literatur 4. 1985.
 Gerhard Wolf : Der Dichter als Zeuge. Neue Deutsche Literatur 4. 1985.